

はん
半 の 木 遺 跡

2000. 3

長野県飯田市教育委員会

例 言

1. 本書は市道万才線改良工事に先立って実施された、飯田市座光寺半の木遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市産業経済部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成10年度に現地作業、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号H N Kを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である1586-3を略号に続けて付した。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。

柱列址	-	S A
溝址・溝状址	-	S D
土坑	-	S K

なお、S D04は整理作業までS D02としていたが、重複のため本報告書ではS D04に変更した。
7. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年版の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に掲載した石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教育委員会 1998）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

本 文 目 次

例言		第2節 基本層序	11
目次		第3節 遺構と遺物	11
第Ⅰ章 調査の経過	1	(1) 土坑	11
第1節 調査に至るまでの経過	1	(2) 溝址	11
第2節 調査の経過	1	(3) 柱列址	12
第3節 調査組織	1	(4) その他の遺構	12
第Ⅱ章 遺跡の環境	3	(5) 遺構外出土遺物	12
第1節 自然環境	3	第IV章 総括	17
第2節 歴史環境	3	引用参考文献	18
第Ⅲ章 調査結果	11	報告書抄録	24
第1節 調査区の設定	11		

挿 図 目 次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	4	挿図 5	S K30~34	13
挿図 2	基準メッシュ図区画調査位置	8	挿図 6	S D04、S A01	14
挿図 3	調査地点周辺地形図	9	挿図 7	周辺柱穴平面図(1)	15
挿図 4	遺構分布図	10	挿図 8	周辺柱穴平面図(2)	16

図 版 目 次

第1図	S D04・遺構外出土遺物(1)	19
第2図	S D04・遺構外出土遺物(2)	20

写真図版目次

図版 1	調査区全景	21
図版 2	溝址 (S D04) 重操作業風景	22
図版 3	作業風景	23

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成9年6月24日付で、長野県飯田市大久保町2534番地 飯田市長 田中秀典より、飯田市座光寺1586-3他での市道万才線改良工事に関する埋蔵文化財発掘の通知が提出された。計画地は埋蔵文化財包蔵地半の木遺跡にかかる。隣接地では、平成8年度に下伊那地方事務所土地改良課所管の広域営農団地農道整備事業－伊那南部2期地区－の工事に先立つ発掘調査が実施され、縄文時代早期・中期、古墳時代前期の集落が調査されている。そこで、平成9年7月28日付 9教文第5-133号で長野県教育委員会教育長より、工事に先立ち発掘調査を実施するよう通知があった。平成9年9月26~28日、本調査が必要な部分の把握と、期間・費用の積算のために試掘調査を実施した。当初、下伊那地方事務所の農道建設と同時に市道改良が計画されていたが、諸般の事情から市道改良が先行することになり、平成10年6月16日付で飯田市教育委員会が改めての見積書・計画書を提出し、市産業経済部と合議を行なった。

第2節 調査の経過

平成10年7月6日、本発掘調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行ない、統いて、7月8日より作業員を入れて作業を開始した。重機の荒れ土を除去し、溝址・土坑・小柱穴その他の遺構を検出し、順次掘り下げて精査した。そして、全体および個別の写真撮影、測量調査等を行ない、7月14日より土の返しを行ない、順次上述の作業を実施した後、7月21日現地での作業を終了した。なお、調査区設定および測量作業のための基準点設置は、株式会社ジャステックに委託実施した。その後、8月末まで飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真等について基本的な整理作業を行ない、概要報告の作成作業にあたった。

平成11年度は、引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・写真撮影作業、遺構図等の作成・トレス作業、版組み等行ない、本報告書作成作業にあたった。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（～平成11年12月）
 富田 泰啓（平成11年12月～）

調査担当者 馬場 保之

調査員 佐々木嘉和・山下 誠一・吉川 豊・渋谷恵美子・吉川 金利・伊藤 尚志

下平 博行・福澤 好晃・坂井 勇雄

西山 克己（財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、
平成10年度）・藤原 直人（同前、平成11年度）

作業員 岡田 直人・熊谷 義章・小島 康夫・樋本 宣子・福沢トシ子・正木実重子

松下 省三・柳沢 謙二・吉川 正実

新井 幸子・新井ゆり子・池田 幸子・伊東 裕子・金井 照子・金子 裕子

唐沢古千代・木下 早苗・木下 玲子・小池千津子・小平 晴美・小平まなみ

小林 千枝・斎藤 徳子・佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐藤知代子・関島真由美

高木 純子・高橋 恭子・竹本 常子・田中 薫・筒井千恵子・中沢 温子

中田 恵・中平けい子・林 勢紀子・林 ひとみ・原 昭子・平栗 陽子

福沢 育子・福沢 幸子・牧内喜久子・牧内 八代・松下 博子・松島 直美

松本 恵子・三浦 厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山 律子・吉川 悅子

吉川紀美子

（2）指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

（3）事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畠伊之助（博物館課長）

小林 正春（ “ 埋蔵文化財係長）

吉川 豊（ “ 埋蔵文化財係、～平成11年3月）

山下 誠一（ “ “ ～平成11年3月）

馬場 保之（ “ “ ）

渋谷恵美子（ “ “ 、平成11年4月～）

吉川 金利（ “ “ ）

福澤 好晃（ “ “ ）

伊藤 尚志（ “ “ ）

下平 博行（ “ “ ）

坂井 勇雄（ “ “ 、平成11年4月～）

牧内 功（ “ 庶務係）

松山登代子（ “ “ 、平成11年4月～）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上・中・下段に分けられる。上段は木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曾川・栃ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。中段は上・下段に比較して非常に幅が狭く、市座光寺支所付近では下段との比高差は小さく、北側では南大島川の上部浸食谷と連続する。下段は数段の小段丘からなり、南側は比較的段丘面がよく残る。これに対して北側は、南大島川の押し出しにより段丘崖が不明瞭になっている。

半の木遺跡は座光寺地区の北部中央、中段上に所在する。座光寺地区と高森町を画する南大島川が木曽山脈より流れ出しており、その解析谷は浸食が著しく規模が大きい。その浸食谷は地区中央部では南大島川の現河床から2段を成しており、上部は比較的広い面となっている。半の木遺跡は浸食谷上部の南端で、上段との比高差約20m、また、南大島川との比高差も約20mを測る。

微地形をみると、半の木遺跡とその北側美女遺跡の間には、南大島川旧河道と考えられる窪地が北西から南東方向に続いている。そこに、天保3年に築かれた「美女下の堤」と明治4年に築かれた「美女上の堤」、および「半の木井」がある。調査地点は半の木遺跡の西端部にあたる。

第2節 歴史環境（挿図1）

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証は旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形の特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と中・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上段では縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原遺跡・中島遺跡がある。

縄文時代草創期よりも古い遺跡・遺物はこれまでのところ確認されていない。縄文時代早期では、宮



1. 半の木遺跡 2. 美女遺跡 3. 大井遺跡 4. 大久保遺跡 5. 大門原遺跡 6. 米の原遺跡
 7. 宮崎A遺跡 8. 宮崎B遺跡 9. 大門原B遺跡 10. 大門原D遺跡 11. 井下横古墳
 12. 南原遺跡 13. 座光寺原遺跡 14. 中島遺跡 15. 北本城跡 16. 北本城古墳 17. 南本城城跡
 18. 浅間岩 19. 壱文蔵3号古墳 20. 鞋地1号古墳 21. 新井原。石行遺跡 22. 新井原12号古墳
 23. 高岡1号古墳 24. 高岡3号古墳 25. 高岡4号古墳 26. ナギジリ1号古墳 27. 金井原瓦窯址
 28. 如来寺境内 29. 古瀬平遺跡
 恒川遺跡群…A. 新屋敷 B. 阿弥陀恒外 C. 恒川B D. 恒川A E. 田中・倉垣外 F. 薬師恒外

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

崎A遺跡（長野県教委 1971）。米の原遺跡・大門原遺跡で押型文土器が出土している。中期は多くの遺跡が知られているが、発掘調査された事例は少ない。大久保遺跡では、中期初頭の竪穴住居址1軒が調査され、良好な土器群が得られている（飯田市教委 1997）。大門原遺跡は東面した緩傾斜の扇状地扇央部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。この他、宮崎B遺跡・座光寺原遺跡（今村 1967）・宮崎南原遺跡では、縄文時代中期後葉の住居址が調査されている（長野県教委 1971）。後・晩期は、断片的に遺物出土がみられるのみで、人々の生活の場はほとんど確認されていない。その中で、山中の大笛遺跡（周辺遺跡位置図範囲外）では、後期前葉の注口土器等が出土している。南大島川縁の大井遺跡では、詳細時期不明であるが、3基の集石が調査され、川に面した臨時的な調理場と考えられている（飯田市教委 1997）。

弥生時代では、中期の遺跡はほとんど知られておらず、後期に遺跡数の急激な増加がみられ、米の原遺跡や大門原遺跡でも土器片が採集されている。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。後期前半の座光寺原遺跡（今村 1967）や大門原B遺跡（長野県教委 1971）は後半までは継続しておらず、短期間に集落が廃絶している。続く後期後半では、中島遺跡（下伊那誌編纂會 1991）・宮崎A遺跡等の調査例がある。中島遺跡は、昭和50年農業構造改善事業に伴ない、道路部分が調査され、さらに、平成8・9年度には広域農道新設に先立ちその東側部分が発掘調査され、大規模な集落であることが改めて確認された（飯田市教委 1999c）。座光寺原遺跡・中島遺跡とも低湿地を控えており、畑作と水稻を組み合わせていたと考えられる。

古墳時代では、大井遺跡で南大島川旧河道から管玉2点が出土しているが、他に当該期の遺構が確認されていないことから、遺跡の性格等不明な点が多い。この他、上段では、古墳は井下横古墳1基があるのみで、考古学的な痕跡は稀薄となる。同様に奈良・平安時代についても断片的に遺物が得られているにすぎない。現状では、古墳時代以降は散在的に小規模な集落があった可能性が考えられよう。

中世には、段丘崖上部に北本城城跡（1981年調査）・南本城城跡・浅間岱が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かしている。北本城城跡は4つの曲輪を主体とした居城的な城郭で、16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等全くなく、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。平成2年度に行なわれた児童センター建設に先立つ2つの曲輪の調査では、恒久的な施設ばかりでなく簡易的な施設も確認され、この部分が居住機能と防御機能とを併せ持っていたことが明らかにされた（飯田市教委 1992a）。南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡で、防御施設の整った防御専門の城郭で、北本城城跡に関連するとされる。

近世では、大門原D遺跡で火葬墓・土葬墓5基が調査されている（長野県教委 1971）。

中・下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占地した地点を若干異にしている。

旧石器時代終末から草創期にかけての遺物は、新井原・石行遺跡で中世の溝址から有舌尖頭器が出土している（岡田 1986）。

縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。中期を除く他時期は遺物が中心で、集落の実態は明確でないが、資料が十分でない時期にあっては比較的良好な資料を提示している。草創期の遺構・遺物は美女遺跡（飯田市教委 1998）で断片的に確認されており、爪形文土器群・表裏縄文土器が出土している。早期では、美女遺跡では立野式期の集落が調査され、11軒の竪穴住居址・炉穴・集石等の遺構や多くの土器・石器が出土している。立野式土器の成立過程を解明すると同時に、伊那谷における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で、重要な遺跡である。また、本遺跡では、広域農道建設に先立つ発掘調査で穂沢式土器や同じ時期の遺構が調査されている（同 2000）、新井原・石行遺跡で細久保式土器・沈線文土器・条痕文土器等が出土している。さらに、恒川遺跡群の新屋敷遺跡では細久保式・高山寺式土器の出土や、相木式期の遺物集中や塩屋式期の遺構等がある（同 1986）。続く早期後葉には、本遺跡で土坑から茅山下層式土器1個体が出土しているし、美女遺跡では早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれており、早期後葉～前期初頭の良好な土器群が得られている。前期は、前述の美女遺跡を除けば、断片的な資料が恒川遺跡群で得られているにすぎない。しかし、中期については、新井原・石行遺跡で後葉のかなり大規模な集落の一部が調査されており、低位段丘の大規模集落の存在に目を向けさせることになった。後期から晚期前半にかけての様相は、前期同様群らかではない。晚期終末には新井原・石行遺跡から竪穴住居址と浮線文系や条痕文系の土器群が見つかっている。また、美女遺跡では貯蔵穴群が調査され、半の木井に面した低地に水場遺構があった可能性が指摘されている。

弥生時代には、中期前半は断片的な資料はあるものの、これまでのところ遺構が認められない。後半には恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が調査されており、広範に住居址が分布し、段丘上全体を居住空間とした集落展開がする。後期前半には遺構の分布が稀薄になり、段丘上の特定地域に居住空間を限定した可能性が指摘されている。後半になると住居址が恒川遺跡田中地籍に集中し、その中でも台地縁辺部の集落域とより内側の墓域の分化がみられるようになる（同 1988）。また美女遺跡では石囲炉をもつ住居址が1棟調査されている。

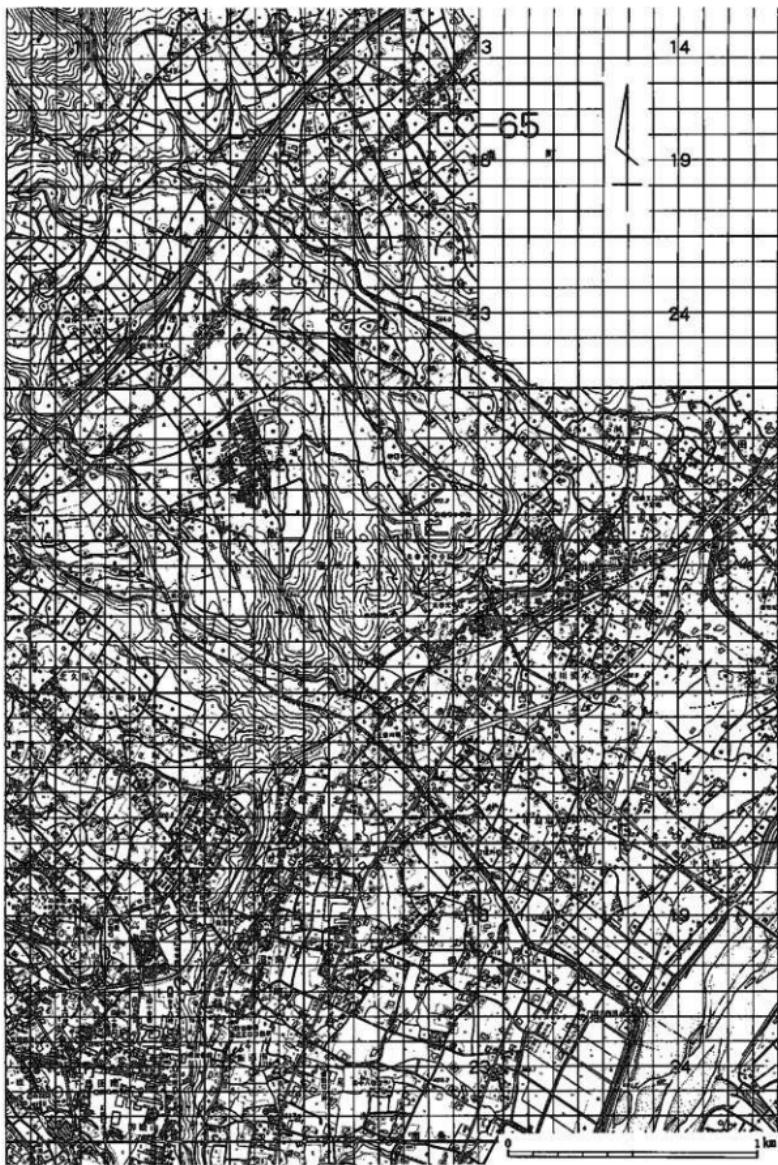
古墳時代前期においては、基本的に前時代にみられた集落展開が継続する。そうした中で、本遺跡では弥生時代の遺構・遺物はこれまでのところ確認されていないものの、前期の住居址1軒が調査されている。後期になると、恒川遺跡群では住居址が増加し、ほぼ全域に分布が拡大する。遺物等からみた3～4小期の変遷では、奈良時代直前には新屋敷遺跡や恒川遺跡恒川B地籍に限定的に遺構がみられるところから、この時代の集落の在り方は必ずしも一様でなく、終末期にはより政治的な規制が加わった可能性が指摘されている（同 1986）。古墳は竜丘地区・松尾地区に次いで多く築造されており、後期の古墳が多い。その分布は集落の外縁の、高岡第1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および恒川遺跡群東側の段丘崖上等にみられ、集落域・生産域とは分化された姿がある。これまで調査された古墳は新井原12号古墳（1922年・1980年調査、飯田市教委 1986）をはじめとする新井原古墳群・畦地1号古墳（1923年他調査）、北本城古墳（1981年調査）、老丈藪3号古墳（1984年調査）、高岡3号・4号古墳（飯田市教委 1990）・ナギジリ1号古墳（同 1998）等がある。新井原12号古墳では4号土坑から馬具・馬骨が出土し、12号古墳に副葬されたと考えられる。新井原2号古墳では鹿の線刻画のある埴輪片が出土した他、周溝内部から馬を副葬した土坑3基が見つかっている。同じく新井原13号古墳の南東側で殉葬馬の土坑1基が調査されている（同 1999）。畦地1号古墳では銀製垂飾付長鎖式耳飾が出土し

ている。北本城古墳は上段の段丘の縁に占地する。前方後方墳ではないかとされる古墳で、こうした墳形は飯田下伊那地方では他に長野県史跡代田山狐塚古墳があるだけである。濃尾地方の前方後方墳との関連が指摘されている。宅丈藪3号古墳やナギジリ1号古墳は、副葬品に後期古墳に特徴的とされる馬具類が多く、追葬の結果複数組の金環がある。

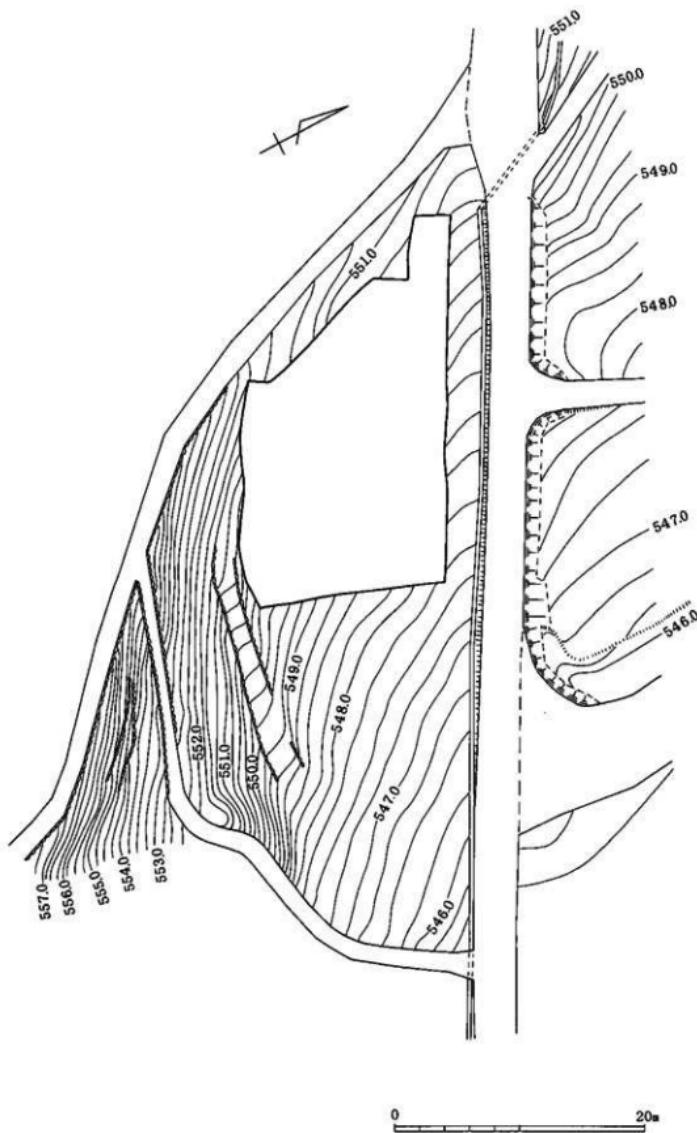
奈良時代には信濃國伊那郡に含まれ、恒川遺跡群はかねてより古代「伊那郡衙」ないしは『三代実録』にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鉢・和同開称銀鏡等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（同 1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的な地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。さらに平成7・8年度の薬師垣外地籍の調査では、区画の溝内部から古瓦が出土し、郡家ないし寺院が付近に存在する可能性が指摘されている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍・新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（同 1988・1991a・1991b）。この時代には金井原瓦窯址で瓦生産が行なわれ、半地下無段式窯1基と工房址2棟が調査されている（宮澤 1953・54・飯田市教委 1996）。西三河北野系の影響を受けているとされ、高森町古瀬遺跡からも同范の瓦が出土している。また、前述の恒川遺跡群薬師垣外地籍の他、如来寺境内、古瀬平遺跡、新井原・石行遺跡からも古瓦が出土している。

平安時代から中世にかけては、恒川遺跡群を中心に住居址・建物址・溝址・土葬墓・火葬墓等が調査されている。恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小銀冶遺構を伴なう住居址が多いことから、前代の郡衙との関わりが指摘されている。新井原・石行遺跡では灰釉陶器・藏骨器を伴なう火葬墓等が調査されており（下伊那教育会 1967・飯田市教委 1999）、官人層の墓所とも考えられている。この遺跡では、平安時代の遺構から押出仏が出土しており、高岡古墳群・古代伊那郡衙・寂光寺等との関連で注目されている。中世には新井原・石行遺跡で土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこの辺りが墓域であった様子がうかがえると同時に、六道思想定着以前の墓制として、経石を副葬する集石墓があつたと考えられている。

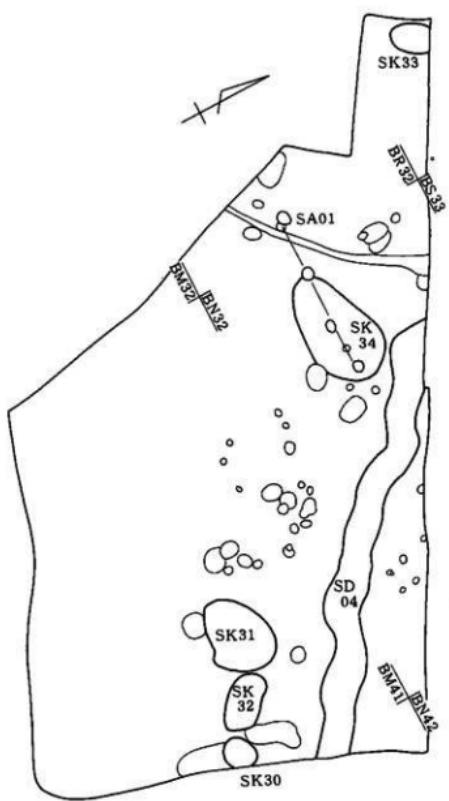
以上、座光寺地区の遺跡を中心に各時代を概観した。この歴史的脈絡の中で、本遺跡の今次調査がどのように位置づくかは、以下本書の内容に譲る。



挿図2 基準メッシュ図区画調査位置



挿図 3 調査地点周辺地形図



0 10 m

挿図4 遺構分布図

第三章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図2）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-65 22-39内に位置する。

第2節 基本層序

基本層序は挿図6のとおりであり、Ⅱ層下面で遺構を検出した。段丘崖下の急斜面から緩斜面に移行する部分に位置し、遺構検出面までは比較的浅い。

第3節 遺構と遺物（挿図4）

調査された遺構の概要は、以下のとおりである。主に緩傾斜部分に立地する。

土坑	5基
溝址	1条
柱列址	1基
小柱穴	多数

（1）土坑（挿図5）

遺構名	検出区	規模(長×短×深)cm	形態	覆土	時代・時期	出土遺物	備考
S K30	B J41	145×121×33	楕円形	黒褐色土	-	なし	炭混
31	B K39	343×256×15	不整形	褐色土	-	なし	
32	B K40	244×142×21	楕円形	褐色土	-	なし	
33	B T30	(164)×115×11	楕円形	暗褐色土	-	なし	
34	B P34	472×250×7	不整楕円	暗褐色土	-	なし	S A01に切られる

（2）溝址

①SD04（挿図6）

調査区の北東側で検出された。1～3層には径20～40cm大の礫が含まれる。底面に水が流れた痕跡として凹凸がある。幅1.2～1.6m、深さ40～66cmを測り、やや蛇行するが、長軸方向N48°Wをとる。

主に、縄文時代後期・古墳時代前期（第1図7～第2図5）の遺物が出土しており、土器・石器類は摩滅が著しい。第1図12は、調査区東端際からほぼ1個体まとめて出土し、他の遺物に比べ摩滅していない。

遺構名	層	J I S 標準色票	土壤色	土性	しまり	粘性	備 考
S D04	I						耕土
	II	7.5YR 3/2	黒褐	S i C	良	有	7.5YR 4/3褐10%混じる
	1	7.5YR 2/3	極暗褐	S i C	良	有	
	2	7.5YR 2/2	黒褐	S i C	不良	やや有	
	3	7.5YR 3/2	黒褐	S i C	不良	有	
	4	10YR 4/4	褐	S	不良	なし	

(3) 柱列址

② S A01 (挿図6)

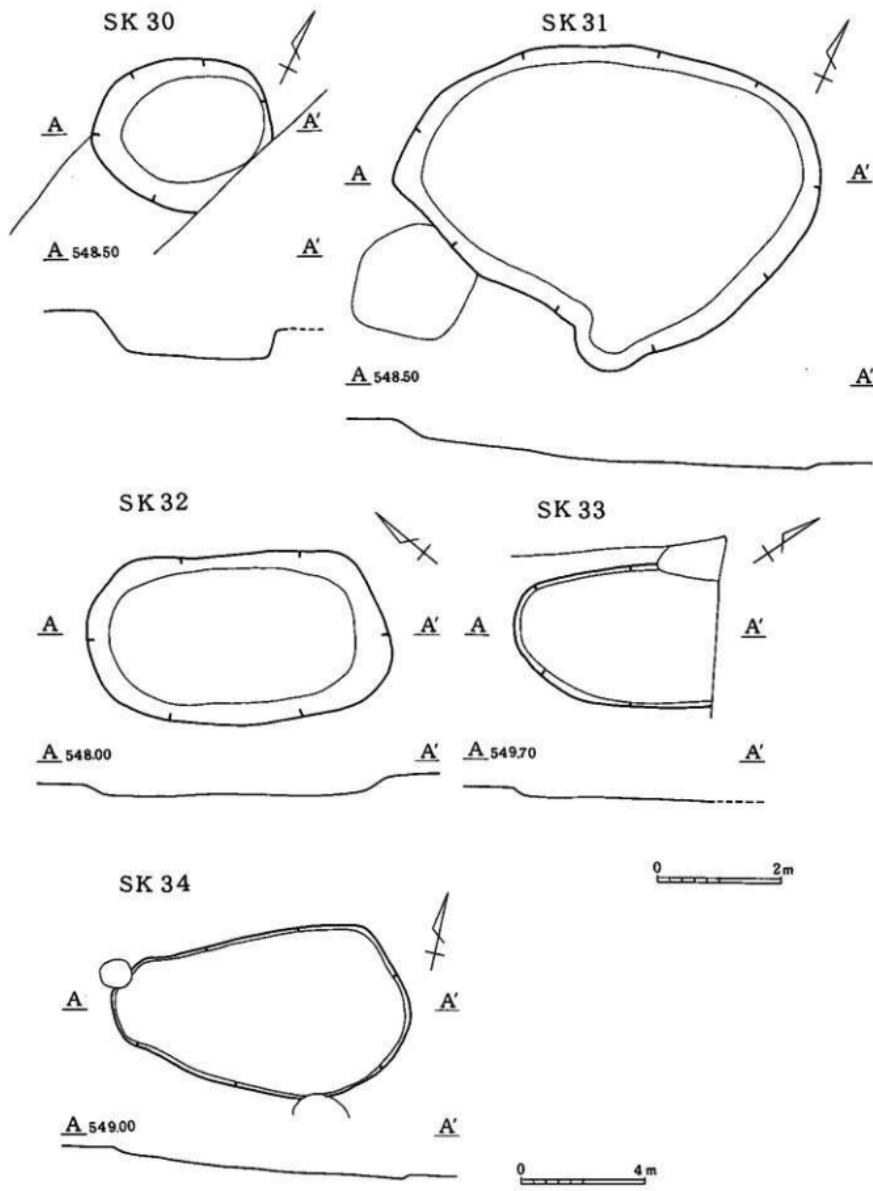
B P32区を中心に検出された。SK34を切り、埋土褐色土である。詳細時期は不明であるが、平面形から中・近世のものと考えられる。

(4) その他の遺構

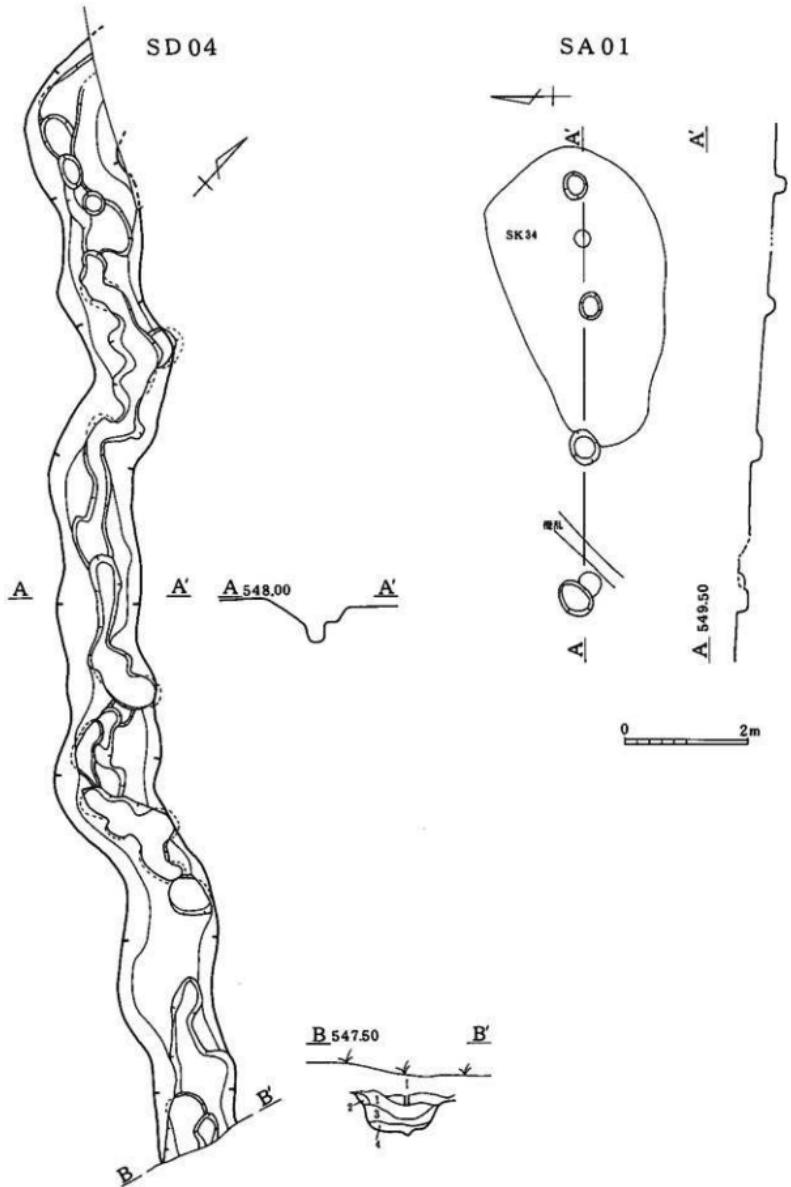
S D04の両側を中心に、径20～50cm程度の小柱穴が調査されている。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(5) 遺構外出土遺物

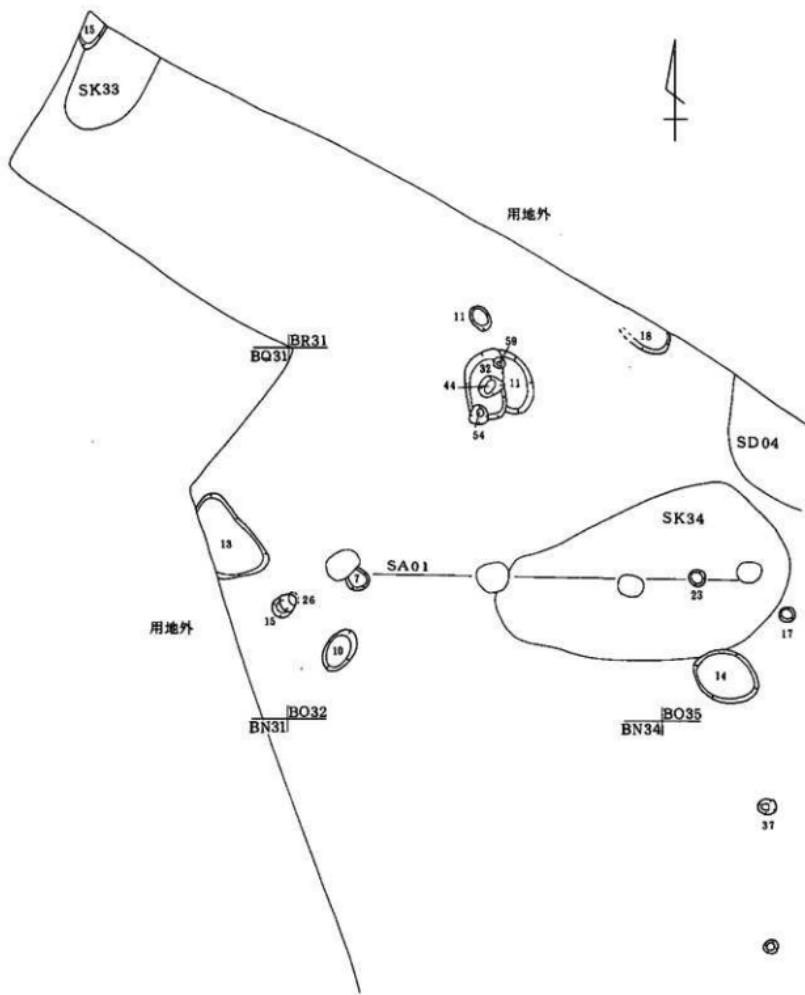
縄文時代早期後葉の条痕文系土器片（第1図1～5）、中期後半の唐草文系土器（同6）、石器類（第2図6～9）が出土した。第1図6は著しく摩滅している。



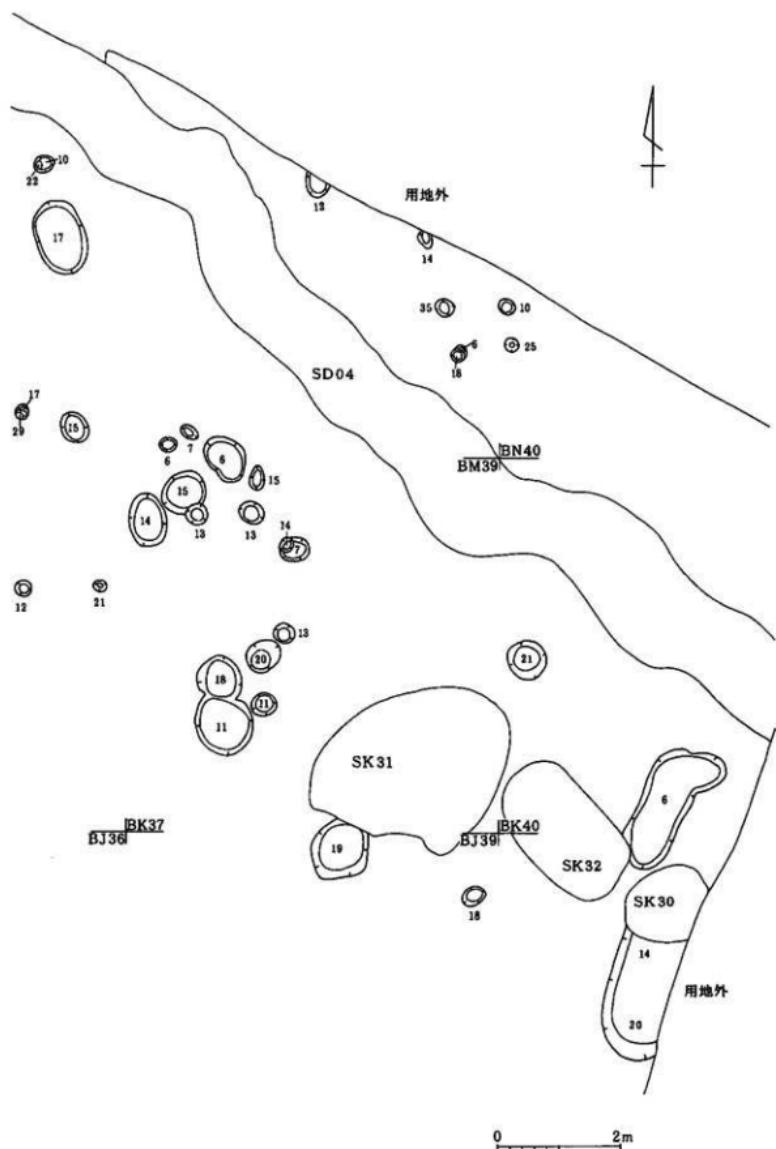
插図5 SK 30~34



插図6 SD04、SA01



挿図7 周辺柱穴平面図(1)



挿図8 周辺柱穴平面図(2)

第IV章 総括

今次調査地点は急な斜面から傾斜が緩やかになる地形の変換点付近にあたり、集落の縁辺部にあたることが予想された。調査の結果、遺構・遺物は非常に疎らな分布状態を示し、周縁的な状況が確認され、当遺跡の集落の端部が把握できたと考えられる。各時代ごと概括して、総括としたい。

1. 縄文時代

明確に該期に比定される遺構はなく、縄文時代早期後葉の条痕文系土器片や、中期後葉・後期後葉の土器片が遺構外やSD04埋土から出土している。

広域農道路線内で調査された早期押型文期の遺構・遺物は確認されておらず、それぞれの調査結果を総合すると、該期の遺構・遺物の分布はきわめて狭い範囲に限定される。遺構外出土の早期後葉の条痕文系土器片は、広域農道路線内の土坑内で出土した茅山下層式深鉢1個体と同じ特徴を示すことから、同時期と考えられる。美女遺跡では早期後葉から末葉にかけての複数の土器型式があるのに対して、本遺跡では茅山下層式に限られるようで、一時的な生活の場であったことが考えられる。

中期後半には広域農道路線内調査区で堅穴住居址が1棟調査されている。これ以外の遺構が確認されていないことから、該期の集落は今次調査地点まで広がらないか、集落の規模が小さいことが考えられる。

後期については、断片的な遺物以外に生活の痕跡はない。これらの遺物は、SD04埋土を中心に出土し摩滅が著しいことから、上流側の遺跡から流ってきたものと考えられる。

2. 古墳時代以降

これまで本遺跡では、広域農道路線内で古墳時代前期の住居が調査されたことから、該期の住居検出が期待された。しかし、本書の内容のとおり住居ではなく、出土遺物から溝址がこの時期に比定されたのみである。SD04は断面形や蛇行する状況から、人為的に開削されたとは考え難いが、一方で傾斜の変換点に沿って流下しており、營力に反する部分がある。そうして点で、集落を区画するような機能を想定することも可能であろう。集落景観を語るにはなお材料不足という感はあるが、住居と溝址の位置からみて住居が散在する集落景観が推定されよう。こうした集落景観は、隣接する美女遺跡で調査された弥生時代後期後葉の集落と共通するところである。

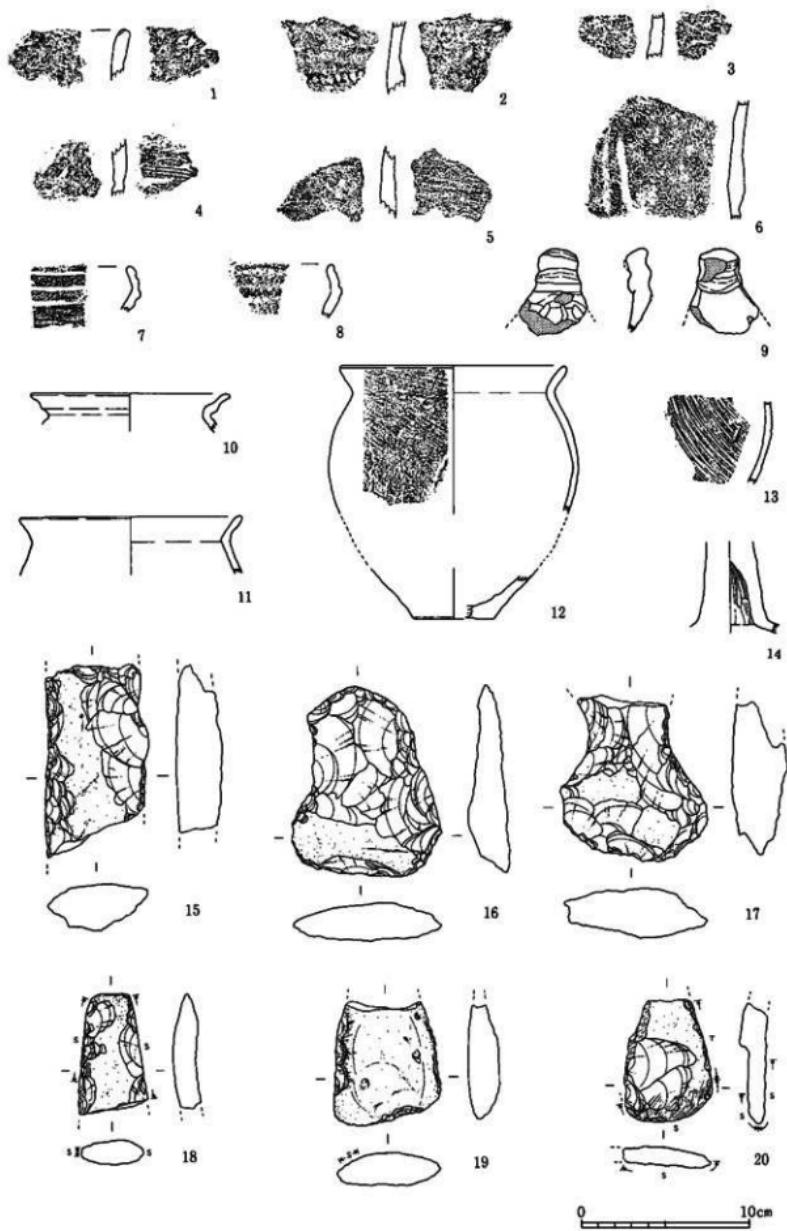
SD04からは、第1図12のみほぼ1個体がまとまって出土しており、溝址に関連した祭祀が行なわれた可能性を指摘できよう。これ以外には、著しく摩滅した遺物が多い。これまで座光寺地区の高位段丘上には、古墳時代から平安時代にかけての集落は知られておらず、井下横古墳と、大井遺跡SD01から出土した管玉2点が目を引く程度である。SD04出土の大半の遺物が、流水の影響を受けて著しく摩滅している状況から、本遺跡の北西側上流部には古墳時代以降の集落があると考えられる。

3. 中・近世

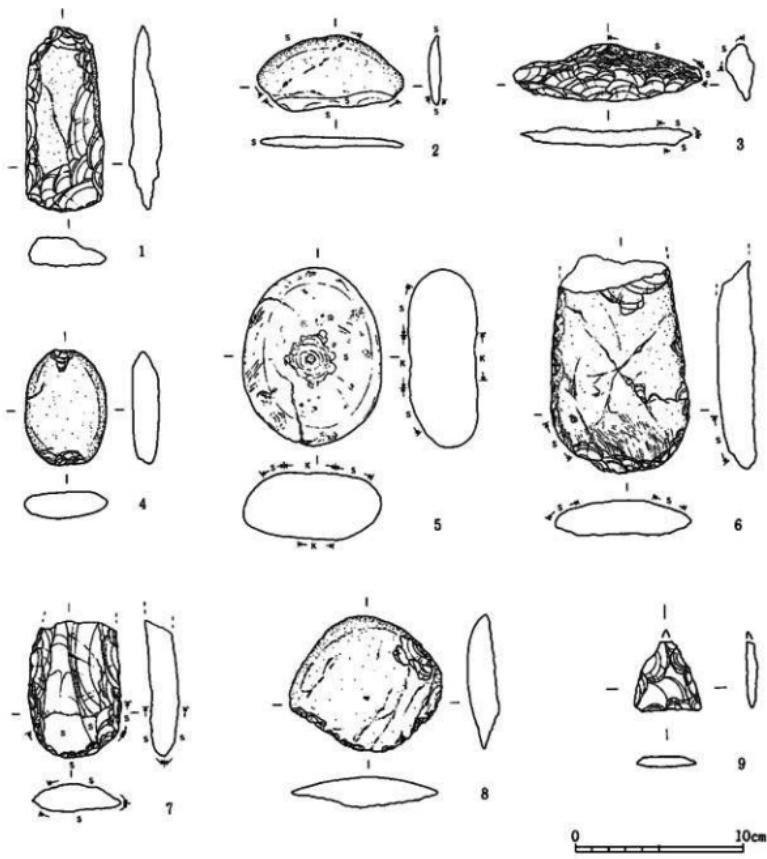
この時期に比定されるものとして柱列址や小柱穴があり、建物址や区画施設の存在が考えられる。

《引用・参考文献》

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会 1988 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1990 『高岡遺跡 -高岡3・4号古墳-』
飯田市教育委員会 1991 a 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』
飯田市教育委員会 1991 b 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1991 c 『高岡遺跡 -新井原18号古墳-』
飯田市教育委員会 1992 a 『北本城々跡』
飯田市教育委員会 1992 b 『恒川遺跡群 白山遺跡』
飯田市教育委員会 1993 『恒川遺跡群 恒川A地籍』
飯田市教育委員会 1994 『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
飯田市教育委員会 1996 『上野遺跡・金井原瓦窯址』
飯田市教育委員会 1997 『大井遺跡 大久保遺跡』
飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
飯田市教育委員会 1998 『ナギジリ1号古墳』
飯田市教育委員会 1999 a 『大門原遺跡』
飯田市教育委員会 1999 b 『新井原・石行遺跡』
飯田市教育委員会 1999 c 『座光寺中島遺跡』
飯田市教育委員会 2000 『半の木遺跡』
飯田市教育委員会 1982~97 『恒川遺跡群範囲確認調査概報』
今村善興 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4号
岡田正彦 1986 「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』34-6
座光寺考古学研究会 1976 「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」『伊那』24-3
座光寺村史刊行委員会 1993 『座光寺村史』
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第二卷
下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』第一卷
鳥居龍藏 1924 『下伊那の先史及原史時代』
長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-飯田地区-昭和45年度』
長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻(一) 遺跡地名表』
長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全一巻(三) 主要遺跡(南信)』
宮澤恒之 1967 「飯田市中島遺跡」『長野県考古学会誌』4号
宮澤恒之 1953・54 「下伊那郡座光寺村金井原瓦窯址報告」『伊那』1-12、2-2、2-3



第1図 SD04・遺構外出土遺物(1)



第2図 S D04・造構外出土遺物 (2)



調査区全景



同上

図版 2



溝址 (SD04)



重機作業風景



作業風景



同上

報告書抄録

ふりがな	はんのきいせき						
書名	半の木遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545						
発行年月日	西暦2000年3月日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
はんのきいせき 半の木遺跡	飯田市座光寺 1586-3他	2053		35° 32' 25"	137° 51' 15"	平成10年 7月6日から 平成10年 7月21日	380m ² 市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
半の木	集落址	縄文時代 古墳時代 中・近世	土坑 溝址 柱列址 その他	4基 1条 1基	縄文時代 土器・石器 古墳時代 土師器	遺構・遺物は疎らな分布状況を示し、集落の周縁的な状況が確認された。	

半 の 木 遺 跡

2000年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145
長野県飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
